

語源でみる接尾辞の語彙化

姫 田 慎 也

▶ キーワード

語源、OED、語彙化、
短縮語、転換

▼ 要 旨

接辞の中には、語に付与して派生語を形成するだけでなく、接辞そのものが語彙化し、接辞自体が語となる例が存在する。接辞の語彙化には語形短縮によるものと転換によるものがある。本稿では語源別に、アングロ・サクソン語系、ギリシャ語系、ラテン語系の3つに接尾辞を分け、それぞれの特徴について分析した。

アングロ・サクソン語系では、OED で接尾辞及び語の両方の記載がある8項目中、-hood/hood のみが語形短縮によるものであり、他の項目においては、-like/ like, -long/ long, -way/ way, -wise/ wise, -worthy/ worthy の5項目が接尾辞の語彙化ではなく、語から接尾辞への転換があった。-ful/ full と -some/ some については、接尾辞と語の初出年が同時代であるため、接尾辞、語のどちらからの転換であるが不明確であった。

ギリシャ語系では、6項目中、-gram/ gram, -meter/ meter, -phone/ phone, -scope/ scope の4項目が語形短縮によるものであり、転換による語彙化については、-ism/ ism と -sphere/ sphere が確認できた。

ラテン語系では、3項目中、-ade/ ade のみが語形短縮によるもので、転換については -logical/ logical と -style/ style が確認できた。接尾辞 -logical は、形容詞 logical よりも初出年が古いため接尾辞から語への転換である。接尾辞 -style は、名詞 style の方が初出年が古いため、語から接尾辞への転換である。

1. はじめに

西川 (2013) によると、英語の接頭辞 (prefix) は約 155 種類、接尾辞 (suffix) は約 133 種類、合計約 288 種類存在する。接頭辞は主に基体 (base) に付与することによって基体の意味を変化させ (例: kind⇒unkind, possible⇒impossible)、接尾辞は主に基体に付与することによって基体の品詞を変化させた派生語 (例: 形容詞 kind⇒名詞 kindness、名詞 atom⇒形容

詞 atomic) を形成する⁽¹⁾。

接辞の中には、語に付与して派生語を形成するだけでなく、接辞そのものが語彙化して語として存在する例（接頭辞 ultra⇒形容詞 ultra、接尾辞-ist⇒名詞 ist）が確認できる。姫田（2022）では接辞の語彙化について、接辞が付与した派生語が省略され語形短縮（clipping）するパタン⁽²⁾、接頭辞そのものが語に転換（conversion）するパタン⁽³⁾、派生語の語形短縮と接辞の転換の両方がみられるパタンの3パタンが述べられている。

派生語から語形短縮した例として、竝木（2009: 25）は（1）をあげている。（1）の ex は接頭辞 ex- が基体である husband に付与した派生語 ex-husband を語形短縮したもので、基体である husband 全てが省略されている。

- （1） He is my ex.（彼は私の元夫です。）（竝木 2009: 25）

接辞の転換として竝木（2009: 25）は（2）をあげている。（2）では接頭辞 retro- が転換し、形容詞 retro として用いられている。転換時に他の接辞等の付与がなく、そのままの形で接頭辞が形容詞として用いられている。

- （2） This chair is very retro.（この椅子はとても懐古趣味的だ。）（竝木 2009: 25）

姫田（2022: 40-46）では、語形短縮と転換の両方が見られる例をあげている。（3a）の mini は接頭辞 mini- が付与した派生語 miniskirt が語形短縮し、名詞 mini として用いられている。（3b）の mini は接頭辞 mini- が転換し、名詞 mini として用いられている。

- （3） a. One after another, Arab states are banning the mini.
（OED, *mini* = miniskirt, n.2）
b. The new-size Rainbow Chips Deluxe cookie and other minis. （OED, *mini*, n.4）

本稿では、語形短縮及び転換によって語として用いられる接尾辞について、語源別にグループ分けし、調査することを目的とする。接尾辞を調査するにあたり、辞書によっては接尾辞ではなく連結辞と記載する例が複数存在するため、2. では接辞と連結辞の違いについて述べ、それぞれの辞書が実際にどのように記載しているのかを調べる。それぞれの項目をアングロ・サクソン語系、ギリシャ語系、ラテン語系の3つのグループに分け⁽⁴⁾、接尾辞と連結辞のそれぞれの辞書における記載について分析する。語源別に、アングロ・サクソン語系、ギリシャ語系、ラテン語系の3つのグループに分け、3. では語源別にみた語形短縮による語彙化について、4. では語源別にみた転換による語彙化について考察する。5. では、クラスⅠ接辞とクラスⅡ接辞との違いの観点から、本稿で扱う接尾辞の語彙化との関係性について考察する。

2. 接辞と連結辞

2.1. 接辞と連結詞の違い

西川（2013: 16）は接辞及び連結辞について、ともに語としては用いられず、基体に付与することで機能を果し、意味的な指示内容としては接辞が比較的希薄である一方、連結詞は固有の指示的な意味をもつ語に近いものであると述べている。

辞書の多くが接辞と連結詞とに分けて記載しているが、LDCE の場合、表 1-3 で記載のあるすべての項目を接尾辞としている。LDCE では接辞について、“a group of letters added to the beginning or end of a word to change its meaning or use, such as ‘un-’, ‘mis-’, ‘-ness’, or ‘-ly’” と述べており、接辞が語よりも小さな単位であるといえる。

また、LDCE では連結辞について、“a word that is combined with another word or another combining form to make a new word, for example ‘Anglo’, meaning ‘English’, in the word ‘Anglo- American’” と述べており、連結辞が接辞よりも語に近い単位であるといえる。なお、LDCE で連結辞についての説明文にあった Anglo- を同じ LDCE で引くと連結辞ではなく接頭辞と記載している。

2.2. 辞書による記載の違い

本節では、語として用いられる接尾辞をアングロ・サクソン語系、ギリシャ語系、ラテン語系の 3 グループに分け、*Oxford English Dictionary Online* [OED], *Oxford Dictionary of English* [ODE], *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* [OALD], *Longman Dictionary of Contemporary English* [LDCE], *Collins Cobuild Advanced Learner's Dictionary* [CCALD], *Random House Unabridged Dictionary* [RHUD], *Webster's New World Dictionary of American English* [WEB] を参照し、各項目が接尾辞、連結辞のどちらで記載しているのかについて調査する。

2.2.1. アングロ・サクソン語系

表 1 は語としても用いられるアングロ・サクソン語系の語尾について、7 つの辞書における記載をまとめたものである。接尾辞、連結辞、記載なしの 3 つに分類した。

表1 アングロ・サクソン語系語尾

	OED	ODE	OALD	LDCE	CCALD	RHUD	WEB
-bound	N/A	N/A	N/A	N/A	CF	CF	CF
-boy	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A
-craft	N/A	N/A	N/A	suf.	N/A	N/A	CF
-free	N/A	CF	N/A	suf.	CF	N/A	CF
-ful	suf.	suf.	suf.	suf.	suf.	suf.	suf.
-hood	suf.	suf.	suf.	suf.	N/A	suf.	suf.
-like	suf.	CF	CF	suf.	CF	suf.	suf.
-long	suf.	CF	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A
-man	N/A	CF	N/A	N/A	CF	CF	CF
-minded	N/A	N/A	N/A	N/A	CF	N/A	N/A
-side	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A
-some	suf.	suf.	suf.	suf.	N/A	suf.	suf.
-son	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A
-way(s)	CF	suf.	suf.	N/A	CF	suf.	CF
-wise	CF	suf.	suf.	suf.	CF	suf.	suf.
-worthy	CF	CF	N/A	N/A	CF	CF	CF

(suf. = 接尾辞、CF = 連結辞、N/A = 記載なし)

アングロ・サクソン語系において、すべての辞書で接尾辞とする項目は -ful のみである。項目の記載のない CCALD を除いて、すべての辞書が -hood, -some を接尾辞と記載している。

接尾辞、連結辞の記載が辞書によって分かれる項目が、-craft, -free, -like, -long, -way(s), -wise である。OED では -craft, -free が記載されていない。

接尾辞、連結辞の記載がある辞書すべてで連結辞としているのが、-bound, -man, -worthy である。OED では -bound, -man が記載されていない。

接尾辞、連結辞ともすべての辞書において記載がないのが、-boy, -side, -son である。「少年」を表す -boy を伴う paperboy, schoolboy は「少年」を表すが、cowboy, bellboy は必ずしも「少年」とは限らない。「～に面する地域」を表す -side には riverside, lakeside 等の語が存在する。「子孫・息子」を表す -son は Anderson, Johnson, Wilson 等、姓を表す語として用いられる。

CCALD のみの記載である「～の心・気質を持つ」を表す -minded は open-minded, commercially-minded 等の形容詞を形成する。CCALD 以外の記載がない -minded と、すべての辞書で記載がない -boy, -side, -son は接尾辞や連結詞よりも大きな単位である、語として辞書では扱われると考えられる。

2.2.2. ギリシャ語系

表2は語としても用いられるギリシャ語系の語尾について、7つの辞書における記載をまとめたものである。表1と同様、接尾辞、連結辞、記載なしの3つに分類した。

表2 ギリシャ語系語尾

	OED	ODE	OALD	LDCE	CCALD	RHUD	WEB
-based	N/A	N/A	N/A	N/A	CF	N/A	CF
-gram	CF	CF	N/A	suf.	CF	CF	CF
-ism	suf.	suf.	suf.	suf.	suf.	suf.	suf.
-meter	CF	CF	N/A	suf.	N/A	CF	CF
-phone	CF	CF	N/A	suf.	N/A	CF	CF
-scope	CF	CF	N/A	N/A	N/A	CF	CF
-sphere	CF	CF	N/A	suf.	N/A	CF	CF

(suf. = 接尾辞、CF = 連結辞、N/A = 記載なし)

ギリシャ語系において、すべての辞書で接尾辞とする項目は -ism のみである。記載のある項目すべてを接尾辞とする LDCE を除き、接尾辞、連結辞の記載がある辞書すべてで連結辞とするのが、-based, -gram, -meter, -phone, -scope, -sphere である。なお、OED では -based の記載がない。

2.2.3. ラテン語系

表3は語としても用いられるアングロ・サクソン語系の語尾について、7つの辞書における記載をまとめたものである。ラテン語系語尾についても接尾辞、連結辞、記載なしの3つに分類することができる。

表3 ラテン語系語尾

	OED	ODE	OALD	LDCE	CCALD	RHUD	WEB
-ade	suf.	suf.	N/A	N/A	N/A	suf.	suf.
-fashion	N/A	CF	N/A	suf.	N/A	N/A	N/A
-general	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A	N/A
-logical	CF	CF	N/A	N/A	N/A	N/A	suf.
-proof	N/A	N/A	N/A	N/A	CF	CF	CF
-tude	suf.	suf.	N/A	N/A	N/A	suf.	suf.
-style	suf.	suf.	N/A	N/A	CF	CF	N/A

(suf. = 接辞、CF = 連結辞、N/A = 記載なし)

ラテン語系において、接尾辞、連結辞の記載のある辞書すべてで接尾辞とする項目は -ade, -tude である。OED、ODE で連結辞として記載のある -tude は attitude の短縮語であるが、短縮語 tude の記載があるのは ODE、LDCE のみである。OED は連結辞 -tude の記載があるものの、語として tude の記載はない。

接尾辞、連結辞が辞書によって分かれる項目が、-fashion, -logical, -style である。OED では接尾辞（連結辞）-fashion の記載がない。また、-logical はギリシャ語源 -logic にラテン語源 -al が付与したものである。ラテン語系項目に含めた -logical は -ological, -logic, -ology, -logy 等、様々な形と語源が混在するが、本稿においては -logical のみを調査対象とする。

記載のある辞書すべてが連結辞であるのが、-proofのみであるが、OEDでは記載がない。

すべての辞書で記載がないのが、-generalである。「全体を統括する人」を表す -general を伴う語として、governor general (総督)、director general (総裁) 等が存在するが、-general は接尾辞や連結詞よりも大きな単位である、語として辞書で扱われると考えられる。

以上、接尾辞か連結辞かについては、一部の項目においては傾向がみられたものの、完全一致とはならなかった。本稿では LDCE の記載に基づき、他の辞書で連結辞とする項目においても接尾辞として扱う。

3. 派生語の語形短縮による語彙化

3.1. アングロ・サクソン語系

アングロ・サクソン語系接尾辞付与による派生語が語形短縮し、接尾辞が語となった例についてみていく。OED で接尾辞と語の記載がある 8 種類のアングロ・サクソン語系の項目において、1 項目のみが語形短縮であると考えられる。

3.1.1. hood

表 1 では、すべての辞書において、-hood は接尾辞と記載されている。「性質、状態、集団、時期等」を表す接尾辞 -hood (初出年：1599 年) が付与した neighborhood からの短縮語 hood は、OED によると初出年は 1967 年である。派生語 neighborhood の初出年が a1425 であるため、語形短縮するまで、500 年以上費やしている。また、OED では hoodlum (不良、チンピラ) の語形短縮としての hood も記載されているが、接尾辞 -hood とは語源が異なり、人名である Muldoon に由来する。(4) の名詞 hood は派生名詞 neighborhood の短縮語である。

(4) The boys in the 'hood are killing each other. (OED, hood = neighborhood, n.3)

3.2 ギリシャ語系

ギリシャ語系接尾辞付与による派生語が語形短縮し、接尾辞が語となった例についてみていく。表 2 の中で、OED で接尾辞と語の記載がある 6 種類のギリシャ語系の項目において、4 項目が接尾辞 (LDCE 以外の辞書は連結辞と記載) 付与による派生語の語形短縮であると考えられる。

3.2.1. gram

OED では、接尾辞 -gram が付与した派生語からの短縮語 gram (初出年：1797 年) は telegram, cablegram の短縮語である。(5) は名詞 gram の使用例であるが、基体が telegram か cablegram かは (5) の文脈のみでは不明である。

(5) What's a guffin?... That's she calls you in her latest 'gram.

(OED, *gram* = telegram or cablegram, n.4)

また、名詞 *gram* は質量の単位である「グラム」の意味でも用いられる。接尾辞 *-gram* も名詞 *gram* もギリシャ語源 *gramma* を起源としている⁽⁵⁾。名詞 *gram* の「グラム」の意味での初出年は1797年である。

3.2.2. meter

OED では、接尾辞 *-meter* が付与した派生語からの短縮語 *meter* (初出年：1797年) は *parking meter*, *gas meter*, *taximeter* 等の短縮語である。(6) は派生名詞 *taximeter* の名詞 *meter* の使用例である。

(6) The cab driver left the meter running while he waited for us.

(OALD, *meter* = taximeter, n.)

また、*meter* には長さの単位を表す「メートル」の意味で用いられ、接尾辞 *-meter* にも同様の意味を持つ。ともにギリシャ語を語源としているが、名詞 *meter* の「メートル」の意味での初出年は1336年である。

3.2.3. phone

OED では、接尾辞 *-phone* が付与した派生語からの短縮語 *phone* (初出年：1880年) は *telephone*, *earphone*, *headphone* の短縮語である。(7) は派生名詞 *telephone* の名詞 *phone* の使用例である。

(7) Over the phone he hears that the computer keys of his interlocutor stop clicking whenever he's not talking.

(OED, *phone* = telephone, n.2)

また、OED では名詞 *telephone* が動詞 *telephone* に転換し、さらに動詞 *telephone* が語形短縮した動詞 *phone* も記載されている。(8) は他動詞として *phone* が用いられた例である。

(8) Was it necessary to phone me?

(OED, *phone* = telephone, v.)

3.2.4. scope

OED では、接尾辞 *-scope* 付与の派生語からの短縮語 *scope* (初出年：1605年) は *cystoscope*, *horoscope*, *microscope*, *telescope* 等の複数の派生語からの短縮語である。製品の開発とともに名詞 *scope* の基体となる派生語は今後増えていく可能性が想定される。(9) の名詞 *scope* は派生名詞 *colonoscope* (内視鏡) の語形短縮の使用例である。

(9) We lubricate the scope with mineral oil. If examination is going to include the right

side of the colon, we begin with the longer colonoscope.

(OED, *scope* = colonoscope, n.3)

また、*scope* は「(研究、活動等の) 範囲、領域」、「(活動等の) 機会、自由」といった意味の名詞、「～を詳しく調べる」の意味の動詞でも用いられるが、語源はイタリア語系である。

3.3. ラテン語系

ラテン語系接尾辞付与による派生語が語形短縮し、接尾辞が語となった例についてみていく。表3の中で、OEDで接尾辞と語の記載がある3種類のラテン語系の項目において、1項目のみが語形短縮であると考えられる。

3.3.1. *ade*

OEDでは、接尾辞 *-ade* が付与した派生語からの短縮語 *ade* (初出年: 1861年) は *lemonade*, *orangeade*, *cherryade* 等の短縮語である。(10) は *lemonade* 以外の接尾辞 *-ade* が付与した派生語の名詞 *ade* 使用例である。短縮語 *ade* がどの派生語からの語形短縮であるのかは文脈によるといえる。

(10) The delivery of *lemonade* and all the other '*ades*'.

(OED, *ade* = *orangeade*, *cherryade*, *gingerade*, etc., n.)

なお、CCALD, RHUD, WEB において *ade* は語として記載されていない。

4. 転換

4.1. 転換による語彙化

接辞から語への転換の場合、接頭辞に関しては(11)のような例がみられる。(11a, b) はギリシャ語系、(11c, d) はラテン語系である。すべての項目において接頭辞の方が語よりも初出年が古く、もともと存在していた接頭辞が語として使用されるようになったものであると考えられる。本稿では(11)の現象について、接辞の転換による語彙化として扱う。

(11) a. 接頭辞 *anti-* (初出年: 1559年) → 名詞 *anti* (初出年: 1788年)

b. 接頭辞 *mega-* (初出年: 1868年) → 副詞 *mega* (初出年: 1966年)

c. 接頭辞 *pre-* (初出年: 1559年) → 前置詞 *pre* (初出年: 1960年)

d. 接頭辞 *ultra-* (初出年: 1551年) → 形容詞 *ultra* (初出年: 1793年)

(11)の接頭辞は様々な基体に付与して多くの派生語をつくる(例: *ultraclean*, *ultrahigh*, *ultramodern*)。しかし、(11)は特定の派生語を語形短縮したものではなく(例: *ultraclean* ≠

ultra, ultrahigh≠ultra, ultramodern≠ultra)、接頭辞が持つ意味を継承し、語として確立したと考えられる（例：接尾辞 -ultra「超、過、極」⇒形容詞 ultra「過激な、極端な」）。

また、接辞の転換による語彙化の中には、一つの品詞に留まらず、多数の品詞を有する例もみられる。例えば、「反対者、反対論者」の意味の名詞 anti、「反対して」の意味の形容詞 anti、「～に反対して」の意味の前置詞 anti は、「反、排、抗、対」の意味をもつ接頭辞 anti が転換したものであると考えられる。

ただし、接辞と語の両方が存在する項目すべてが接辞の転換による語彙化であるといえない例も存在する。たとえば、アングロ・サクソン語系接頭辞 fore- の初出年は c1000 であるが、副詞 fore は古英語から存在する。この場合、接辞の転換ではなく、語の転換によるものであると考えられる。

接尾辞についてどのような転換のパターンがみられるのか、3つの語源別に調べていく。

4.2. アングロ・サクソン語系

表4は OED におけるアングロ・サクソン語系の接尾辞と語の初出年をまとめたものである。

表4 アングロ・サクソン語系の接尾辞と語の初出年

接尾辞	初出年	語	初出年
-ful	OE	adj. n.	eOE
-like	a1450	adj.	OE
-long	OE	adj.l, n.l	eOE
-some	OE	pro.	OE
-way(s)	eOE	n.l	eOE
-wise	OE	n.l	OE
-worthy	early 13 th cent.	adj., n., adv.	eOE

(11) では接頭辞が語に転換した例をみたが、アングロ・サクソン語系の表4においては、-like/ like, -long/ long, -worthy/ worthy の3項目は接尾辞よりも語の方が初出年が古い。また、-wise/ wise, -way(s)/ way の2項目についても、接尾辞 -wise と名詞 wise、接尾辞 -way(s) と名詞 way も表4では初出が同時期であるが、OED によれば、ともに語の方を語源としている。

接尾辞 -ful と形容詞等の full、接尾辞 -some と形容詞等の some は古英語から存在するものの、それぞれの接尾辞の方が語よりも古くから存在するとはいえず、むしろ、OED においては、接尾辞 -ful は形容詞 full を語源と記載されている。接尾辞 -some においては、'approximately' や 'nearly' の意味においては形容詞 some が語源であると記載されている。ただし、接尾辞 -some は古英語 -sum と sum を語源とし、形容詞等の some は古英語 sum を語源とするため、さらに調べる必要がある。

以上のことからアングロ・サクソン語系においては、今後の調査が必要な接尾辞 -some と形容詞等の some を除いて、接尾辞から語への転換ではなく、語から接尾辞への転換があった

ものであると考えられる。

なお、OED では -ful, -like, -long, -some を接尾辞、-way, -wise, -worthy を連結辞と記載しているが、転換に関しては、接尾辞、連結辞の分別は関係がないといえる。

4.3. ギリシャ語系

ギリシャ語系において、-ism/ism と -sphere/ sphere の2項目が語形短縮ではなく、転換であると考えられる。OED によると接尾辞 -ism はギリシャ語源であり、名詞 ism の初出年は1680年である。接尾辞 -sphere もギリシャ語源であり、名詞 sphere の初出年が a1300 である。これらギリシャ語系2項目については、接尾辞から語への転換があったと考えられる。

4.4. ラテン語系

ラテン語系接尾辞について、-logical/ logical と -style/ style の2項目が語形短縮ではなく、転換であると考えられる。OED によると接尾辞 -logical はギリシャ語源である -logic にラテン語源である -al が組み合わさったものであり、OED での形容詞 logical は初出年が ? a1513 であるため、-logical/ logical に関しては、接尾辞から語への転換があったと考えられる。

しかし、OED によれば接尾辞 -style の初出年が1934年であるのに対して、名詞 style の初出年は c1330 であるため、-style/ style に関しては、語から接尾辞への転換があったと考えられる。

5. クラスⅠ接尾辞とクラスⅡ接尾辞

Allen (1978) や Siegel (1974) は、基体に付与することによってアクセントの移動を起こす接辞をクラスⅠ接辞、基体に付与してもアクセントの移動が起こさない接辞をクラスⅡ接辞と分類している⁽⁷⁾。表1-3で、半数以上の辞書が接尾辞と記載している項目において、表1のすべてのアングロ・サクソン語系接尾辞が基体に付与してもアクセントの移動がみられないため、クラスⅡ接尾辞であると考えられる。

- (12) a. -ful: cáre ⇒ cáreful
b. -hood: néighbor ⇒ néighborhood
c. -like: snáke ⇒ snákelike
d. -long: héad ⇒ héadlong
e. -some: hánd ⇒ hándsome
f. -way(s): ány ⇒ ányway

ギリシャ語系接尾辞 -ism においても付与する基体のアクセント移動がみられないため、クラスⅡ接尾辞であると考えられる。

(13) -ism: *patriot* ⇒ *patriotism*

ラテン語系接尾辞 -style は付与する基体のアクセント移動がみられないため、クラスⅡ接尾辞であると考えられる。

(14) -style: *Japanese* ⇒ *Japanese-style*

ここまですべてクラスⅡ接尾辞の例であったが、ラテン語系接尾辞 -ade においては、付与する基体のアクセント移動が起きているため、クラスⅠ接尾辞であると考えられる。

(15) -ade: *lémon* ⇒ *lemonade*

また、ラテン語系接尾辞 -tude に関しては、基体が語よりも小さな単位である形態素 *magni-* への付与するクラスⅠ接尾辞の特徴がみられるためクラスⅠ接尾辞であると考えられる⁽⁸⁾。

(16) -tude: *magni-* + -tude ⇒ *magnitude*

クラスⅠ接尾辞であると考えられるラテン語系接尾辞 -ade と -tude の語彙化はそれぞれ *lemonade*, *orangeade* 等と *attitude* の語形短縮であり、クラスⅡ接尾辞で語形短縮がみられるのは、アングロ・サクソン語系接尾辞 -hood (*neighborhood* ⇒ *hood*) のみであった。接尾辞 -hood 以外の接尾辞はすべてクラスⅡ接尾辞であり、語彙化はすべて転換によるものであると考えられる。

6. 結語

語源別に接尾辞の語彙化についてみてきた。接尾辞の語彙化には大きく分けて、語形短縮によるものと、転換によるものがある。語形短縮による接尾辞の語彙化はギリシャ語系で4項目確認できたものの、アングロ・サクソン語系とラテン語系接尾辞においては、それぞれ1項目のみであった。

アングロ・サクソン語系において、OED で接尾辞及び語の両方の記載がある8項目中、-hood/ *hood* の1項目のみが語形短縮によるものであった。他の7項目においては、-like/ *like*, -long/ *long*, -way/ *way*, -wise/ *wise*, -worthy/ *worthy* の5項目がそれぞれの初出年から語から接尾辞への転換があったことが分かった。残りの -ful/ *full* と -some/ *some* の2項目については、接尾辞と語の初出年が同時代であるため、接尾辞から語への転換であるのか、語から接尾辞への転換であるのかについては不明確である。

ギリシャ語系において、OED で接尾辞及び語の両方の記載がある6項目中、-gram/ *gram*, -meter/ *meter*, -phone/ *phone*, -scope/ *scope* の4項目が語形短縮によるものであった。また、それぞれ語形短縮の基体となる派生語が数種類存在することが分かった。接尾辞 -gram と -meter については、語形短縮だけでなく、転換による語彙化も確認できる。これら4項目に

については、ほとんどすべての辞書が連結辞と記載している。転換による語彙化については、ギリシャ語系では -ism/ism と -sphere/sphere の2項目が確認できたが、いずれも接尾辞よりも語の方が初出年が新しいため、接尾辞から語への転換であると考えられる。また、すべての辞書で -ism を接尾辞と記載し、-sphere についてはほとんどの辞書が連結辞と記載している。

ラテン語系において、OED で接尾辞及び語の両方の記載がある3項目中、-ade/ade のみが語形短縮によるものであった。転換について、ラテン語系では -logical/logical と -style/style の2項目が確認できた。接尾辞 -logical については、形容詞 logical よりも初出年が古いため、接尾辞から語への転換であると考えられる。ただし、接尾辞 -style については、名詞 style の方が初出年が古いため、語から接尾辞への転換であると考えられる。記載のあった辞書すべてが -ade を接尾辞と記載し、-logical と -style については、接尾辞、連結辞の記載が辞書によって異なる。

接尾辞か連結辞かの分類については、ギリシャ語系項目で連結辞とする辞書が多いものの、一部の項目以外、すべての辞書が接尾辞か連結辞で一致することは少なかった。また、辞書における接尾辞、連結辞の記載の違いと、語形短縮、転換の語彙化とについての関係性はみられなかった。

クラスⅠ接辞とクラスⅡ接辞に関して、ラテン語系接尾辞 -ade と -tude にクラスⅠ接尾辞の特徴がみられたが、他の接尾辞は語源に関係なく、クラスⅡ接尾辞であった。今回の調査では語彙化する接尾辞の多くがクラスⅡ接尾辞であったが、調査対象が少なかったため、さらに多くの調査対象を見つけて考察したい。

接辞の語彙化の例については、接尾辞よりも接頭辞の語彙化のパターンが多く存在する⁽⁹⁾。接頭辞についても語源別に語形短縮と転換による語彙化の調査をすることを今後の課題とした。

注

- (1) 竝木 (1985) は現在でも使われている接辞は、接頭辞が70以上、接尾辞は約90と述べている。Kodani (2000: 40-42) は接頭辞の特徴として、多くが付与した基体の意味を変化させた派生語を形成すると述べている。竝木 (1985: 115) によると、品詞を変える接頭辞は、a-, be-, de-, dis-, en-, out-, un- の7つのみである。また、竝木 (2009: 20) によると、接尾辞は原則的に付与する基体の品詞を変える。
- (2) Bauer (1983) は、mathematics が math、telephone が phone のように語が短く略されることを 'clipping' と呼んでいる。竝木 (2009) においては clipping のことを「語形短縮」と呼んでいる。また、clipping された語のことを竝木 (1985)、島村 (1990) では「短縮語」、大石 (1988) では「略語」と呼んでいる。
- (3) 接辞付与がなく品詞が形容詞から動詞、動詞から名詞、名詞から形容詞などに変わる過程について、転換 (conversion)、ゼロ派生 (zero-derivation)、機能推移 (functional shift) 等がある。その違いについては米倉 (2015: 54-81) が詳しい。本稿では接辞の語彙化については転換 (conversion) とする Huddleston and Pullum (2002: 1640) に従う。
- (4) 西川 (2013) を参考に本稿でも接辞をアングロ・サクソン語系、ギリシャ語系、ラテン語系の3つのグループに分けて考察する。
- (5) 本稿では接辞が語として使用されることを語彙化と呼んでいるが、用語としての語彙化を意味の変化や発音の変化について表す場合に用いられることもある。Bauer (2001: 43-47) においては、例えば、意味の変化として、run time は本来の「競争のスタート時間」の意味から変化し、コンピューター用語として「実行時間；実行時」の意味で用いられ、また、発音の変化として、例えば、waistcoat の発音

[wéistcòut] が変化し、[w é skət] の発音になると述べている。

- (6) 本稿ではギリシャ語系に関してはギリシャ文字表記ではなく英語アルファベットに変換した ODE の記載に基づいている。
- (7) クラス I 接辞とクラス II 接辞の特徴と分け方は主にアクセントの移動であるが、アクセント移動がクラス分けの絶対条件ではなく、その他複数の条件も存在する。クラス I 接辞とクラス II 接辞の特徴については、大石 (1988) が詳しい。
- (8) クラス I 接辞の特徴のひとつとして、語よりも小さな単位への付与がみられる。たとえば、クラス I 接尾辞 -ity は形容詞 capable に付与し、派生語 capability をつくることができる。また接尾辞 -ity は語よりも小さな単位である接頭辞 (連結辞) calam- に付与し派生語 calamity をつくることもできる。
- (9) 筆者が行った調査では、接頭辞の語彙化は 40 例以上の存在が確認できた。

辞書

Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary (2018) 9th ed. Glasgow: HarperCollins Publishers. [CCAD]

Longman Dictionary of Contemporary English (2014) 6th ed. Harlow: Pearson Education Limited. [LDCE]

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English (2020) 10th ed. Oxford: Oxford University Press. [OALD]

Oxford Dictionary of English (2010) 3rd ed. Oxford: Oxford University Press. [ODE]

Oxford English Dictionary Online. (2000-present) Oxford: Oxford University Press. Retrieved Apr. 10, 2023. from <https://www.oed.com/> [OED]

Random House Unabridged Dictionary (1993) 2nd ed. New York: Random House. [RHUD]

Webster's New World Dictionary of American English (1991) 3rd College ed., rev. & updated. New York: Prentice Hall. [WEB]

『ジーニアス英和大辞典』(2001) 東京：大修館書店。

『新英和大辞典』(2002) 第 6 版. 東京：研究社。

『リーダーズ英和辞典』(2012) 第 3 版. 東京：研究社。

参考文献

Allen, Margaret (1978) *Morphological Investigation*. Ph. D. dissertation, University of Connecticut.

Bauer, Laurie (1983) *English Word-formation*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bauer, Laurie (2001) *Morphological Productivity*. Cambridge: Cambridge University Press.

姫田慎也 (2022) 「接辞の語彙化」『日本英語英文学』32: 25-49.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kodani, Shinichiro (2000) *English Words: Word-Formation & Evaluable Words*. Kyoto: Ryukoku Gakkai.

竝木崇康 (1985) 『語形成』(新英文法選書 2) 東京：大修館書店。

竝木崇康 (2009) 『単語の構造の秘密：日英語の造語法を探る』(言語・文化選書 14) 東京：開拓社。

西川盛雄 (2013) 『英語接辞の魅力：語彙力を高める単語のメカニズム』(言語・文化選書 39) 東京：開拓社。

西川盛雄 (2021) 『接辞から見た英語：語彙力向上をめざして』(ちょっとまじめに英語を学ぶシリーズ 3) 東京：ひつじ書房。

大石強 (1988) 『形態論』(現代の英語学シリーズ 4) 東京：開拓社。

島村礼子 (1990) 『英語の語形成とその生産性』東京：リーベル出版。

Siegel, Dorothy (1974) *Topics in English Morphology*. Ph. D. dissertation, MIT.

米倉綽 (2015) 『歴史的にみた英語の語形成』(言語・文化選書 54) 東京：開拓社。